



Title	院生主催研究会「SAIHATE FES 2019」について
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 16, 1-12
Issue Date	2020-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83061
Type	bulletin (other)
File Information	Sauvage16.pdf



[Instructions for use](#)

【特 集】
院生主催研究会
「SAIHATE FES 2019」
について



SAIHATE FES 2019

■SAIHATE FES とは？

国メ9期・観光創造2期生の自生的な研究相互交流（輪読会・研究発表会等）の一つの成果として、2010年3月23日に院生同士の修士論文発表会を開催した。同会では両専攻・教員学生の境界を越境した議論が和やかな雰囲気の中、展開され、約30名が参加した。山崎（観光創造D3）の博士課程進学を契機に、2014年に復活。以後、観光創造の学生の間で継承されてきた。今春の両専攻統合により、再び[国メ]×[観光]の相互交流を促進させるべく、「学院生みんなの場」である図書資料室「越境のひろば」共有スペースで開催する。

■今年のテーマは「研究の悩み事・研究者のキャリア（生き方）」

今年は研究内容問わず院生共通の関心事である「研究の悩み事（調査手法、学会発表、研究費獲得等）」、「研究者のキャリア（生き方）（学振、博士進学、社会人学生等）」にスポットを当てる。発表者には上記のテーマを発表に組み込んでもらうが、通常の研究発表でも問題ない。院生発表、ゲスト発表内の関連キーワードは付箋等でホワイトボードに貼り出し、優先順位づけを行う。IMCTSの研究環境向上に向けて、後日学院内にも共有する。

■概要

- ・日時:2019年11月24日（日）13:00～17:30（予定）
- ・場所:IMCTS1階図書資料室（S101）「越境のひろば」
- ・プログラム:研究発表（相談・意見交換）会
（発表10分／質疑15分 ＊交代時間を含む）

■ スケジュール

13:00～13:05	はじまりのことば (杉江聡子・メディア・コミュニケーション研究院 助教)
13:05～13:30 【学生発表 1】	観光創造修士院生 (M1) 翁譽真 タイトル:「広域連携」としての観光地経営政策について—台湾における観光の広域連携に関する実態や課題
13:30～13:55 【学生発表 2】	国際広報メディア修士院生 (M1) Raymond Siru Li タイトル:旅行サイト上の口コミにおける精緻化見込みモデルの適用性検討—カナダとシンガポールの中国系消費者を対象に—
13:55～14:20 【学生発表 3】	観光創造博士院生 (D1) 白承愛 (Seung Ae Baek) タイトル:韓国の大邱市における音楽資源の活用と観光空間の再編成プロセス
14:30～14:55 【学生発表 4】	国際広報メディア博士院生 (D1) 張欣慧 タイトル:負の歴史にまつわるイメージについて:アートとミュージアム展示をふり返る
14:55～15:20 【学生発表 5】	国際広報メディア博士院生 (D1) 崔鵬 タイトル: 映画産業と地域活性化の振興にフィルムコミッションの役割—札幌フィルムコミッションを実例として—
15:20～15:45 【学生発表 6】	観光創造博士院生 (D1) 金千 タイトル: コンテンツツーリズムの新たな可能性—オリジナル・ビデオによる誘発した朝里観光を事例に
16:00～16:40 【招待発表 1】 (発表 20 分／ 質疑 20 分)	殿谷 梓 (三好市役所産業観光部 まるごと三好観光戦略課・ジオパーク地質専門員・博士 (理学)) タイトル:究極の地域密着型の研究者?!—ジオパーク地質専門員を例として—
16:40～17:20 【招待発表 2】	須藤 廣 (法政大学大学院政策創造研究科・教授) タイトル:観光社会学者としてのライフヒストリーについて (仮)
17:20～17:25	むすびのことば (山崎翔・国際広報メディア・観光学院 D3)
17:25～17:45	撤収・現状 (完全!) 復帰
18:00～20:00	懇親会

(以下、一部の発表要ポスターを掲載しています)

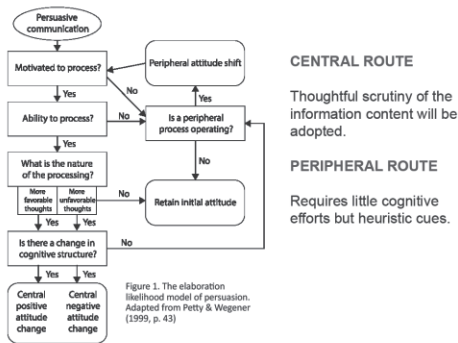
CREDIBILITY IN QUESTION: TRAVEL INFORMATION ADOPTION AMONG CHINESE CONSUMERS IN CANADA AND SINGAPORE

旅行サイト上の口コミにおける精緻化見込みモデルの適用性検討
- カナダとシンガポールの中国系消費者を対象に -

Drawing upon the dual-route theory of information processing, this study examined whether people from the same cultural origin would adopt online travel information differently, in consideration of the influences from their host societies as either being individualistic or collectivistic.

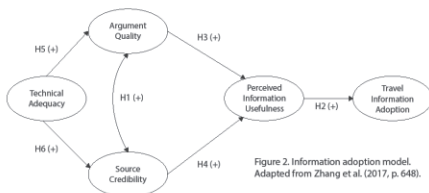
ELABORATION LIKELIHOOD MODEL

The Elaboration Likelihood Model (ELM) is one of the most widely used frameworks to study the persuasive power of online reviews.



INFORMATION ADOPTION MODEL

IAM posits perceived information usefulness as a mediator between argument quality (central route) and source credibility (peripheral route) leading to information adoption.



DIFFICULTIES & LIMITATIONS

SAMPLING ISSUES

- Coverage Bias: Small sample size that limits the generalizability of the study results.
- Education Level: Majority of participants in this study have a bachelor's degree or higher.

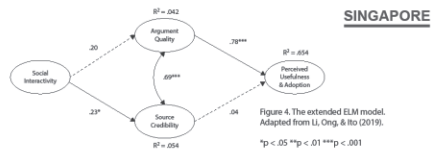
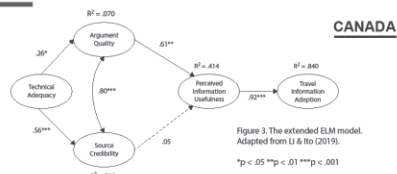
INDIVIDUALISM-COLLECTIVISM

Combined with the ELM, it is believed that the central route may be preferred by individualistic cultures whereas the peripheral route may be more prevalent in collectivistic societies.

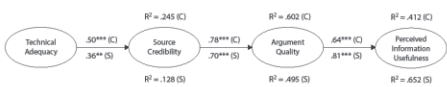
Individualism Distance Index

CANADA	80	Individualistic
SINGAPORE	20	Collectivistic

ABSENCE OF PERIPHERAL ROUTE



MULTI-GROUP ANALYSES OF INVARIANCE



- Central route is preferred regardless of the host societies they happen to live in.
- Direct causal effect from source credibility to argument quality.

韓国の大邱市における音楽資源の活用と観光空間の再編成プロセス

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
国際広報メディア・観光学専攻 博士1年 白承愛
seungae9729@gmail.com



● 研究背景

・ 近年の文化芸術資源の活用と地域創生、「創造都市」に関する議論：文化芸術資源活用の都市空間の再編成のプロセスにおける原理には、過去の中央集権的・画一的な都市発展方式から抜け出し、市民を中心とする自律的で創造的な都市設計、都市の内発発展に基づいている(佐々木 2001)。しかしながら、現在まで急激な高度成長を経てきた韓国においては、西洋中心の創造都市論のうえで考えるには限界が存在する。韓国は首都圏集中の発展により、不均衡発展を経験していたからである(ナム 2014:133)。韓国における都市再生事業や文化地区の設立事業のほとんどが中央政府主導系である点も考えなければならない(バク 2014:165)。

・ 韓国における観光空間の再構築に関する研究：韓国といった国家やソウルといった首都が中心となる視覚が主となっており(金 2017)、ローカルや地域からのアプローチした観点は少ない

・ 音楽資源の活用に関する先行議論(ミュージックツーリズムやサウンドスケープなど)：

音楽そのもののコンテンツの特性に着目し、真正性に関する議論のみに展開されており、都市の景観や音楽資源の性質が固定されたものとしてみなしている。通時的な観点においていかに都市空間への経験が生成され、変化されてきたのかについては論じられていない。

・ 本研究は、韓国の大邱(テグ)市を事例として、音楽資源はいかに活用され、都市の観光空間の再編成をもたらしてきたのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。韓国の中央政府、地方行政、地域住民、観光客といった主体が葛藤・妥協する過程においてさまざまな行為者たちの関係性を通時的な観点に沿って明らかにしていく。そのために、大邱市やその観光をめぐる政策、事業、メディアの動きを探り、アイデンティティ(場所や人、空間のイメージなど)がいかに変容・再編されてきたのかを明らかにしていく。

● 対象地の概要：韓国の大邱市

・ 韓国の大邱市は人口は約244万人であり、韓国のなかで4番目の規模のある都市として知られている。

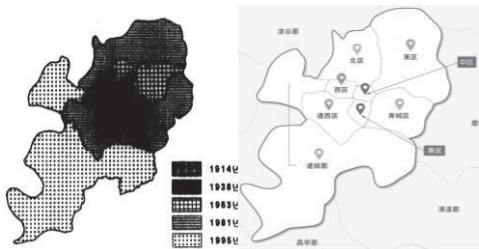


写真1 大邱市行政地区の変遷過程(ジン 2002)
写真2 大邱市の8つの区の地域
(http://www.daegu.go.kr/japanese/index.do?menu_id=00300767)

・ 地理的境界の変化：土地区画整理事業(1970-90年代)により、大規模の新市街地形成、地理的境界再設定、寿城(スソン)区(公共機関、放送局、企業の本社、文化・体育・教育施設などの大量移転)に集中「中心一周辺」の構図形成。

・ 産業都市から音楽都市へ：1970年代ー1990年代繊維産業の中心地、2000年代ー2010年代ファッションと美術資源の観光資源化の試み、2010年代から音楽資源に着目、2017年ユネスコ創造都市の音楽部門に選定

・ 観光市民運動：大学生や文化芸術系の人事、市民団体の人々がYMCA団体を中心に市民主導の都市文化運動を行った(リュ 2014)。大邱市民と直接交流し、インタビューを経て、市民たちの記憶に基づきながら大邱の裏道の観光ロードマップ「新テクリジ(신택리지)」の作成。

・ 観光政策：2000年代以降、韓国中央政府から地域均衡政策の一環として、観光・文化政策、都市再生事業の拡大。2007年大邱市の中区庁の都心開発プロジェクト開始。

・ 大邱市の音楽資源の活用の現状：

- ①「近代音楽の胎動地」：クラシック音楽を先進的に導入した歴史的背景や、歴史的な大邱出身の音楽家の排出の経緯などに繋げている。
- ②音楽と市民たちの交流の演出：メロディーが流れる音楽都市、2003年大邱地下鉄火事事件などの市民における危機を乗り越えるイメージ演出、亡くなった人気歌手を記念する「フォーク音楽通り」を造成し、市民がバスケットを楽しむ環境を作る。
- ③2017年から、ミュージカル・オペラフェスティバル、オーケストラやフォーク音楽公演などを連携した音楽商品を開発している。



写真3 (左) 音楽鑑賞室、「緑香」(筆者撮影 2019年3月12日)

写真4 (右) フォークソング歌手、「キム・グァンソク記念通り」(筆者撮影 2019年3月26日)

● 研究やその環境への課題や悩み

- ・ 理論的アプローチの模索や整理の課題
- ・ 言語チェック制度の必要性(学校の制度上の問題)

主要参考文献

ナム・キボム、2014、「創造都市論、いかにみるべ
バクセフン編『創造都市を超えて』ナナム。(韓国語)
バクセフン、2014、「文化地区の社会経済学」バクセフン編『創造都市を超えて』ナム。(韓国語)
佐々木雅幸、2001、『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』岩波書店。

負の歴史にまつわるイメージについて

～アートとミュージアム展示をふり返る～



[研究概要]

戦争の直接的な経験を持たない人々がいかに戦争の記憶を受け入ればよいのか。日本は、1990年代という「記憶の時代」に入って、アートを通じて記憶を可視化させる作業は重視されるようになってきて、「戦争美術の扉は議論と鑑賞のレベルで閉ざされる」状態が変貌され、記憶の風化を抵抗しながらイメージそのものの存在意義を刷新しつつある。この一連のアート活動は東日本大震災という節目にさらに問い直さざるを得ない。すなわち、戦争の記憶をめぐる「証言」と「記憶」に、震災の「体験」と「記憶」が嵌り込んで、戦争画の展示や現代アートの表象によってさらに語られ共有されること。その背景には、震災を機に戦争のある種の共通体験として初めて直感できることがある。平穏な「今」に「あの日」を再現することは原理的に不可能である原爆及び戦争の記憶は原発事故と重ね合う、という記憶想起の模索は、戦争という負の歴史の表象に新たな意味を付与する。3・11後の日本社会において戦争に向き合う姿勢の変容が検討する必要があり、そのうち、アートによる戦争記憶の構築プロセスとその中身を明らかにして、アートが記憶を語り続ける役割と可能性が一つ重要な視座であると考えられる。

問題点①:「歴史」と「記憶」との共通点や違い

- ・単数形の「歴史」 vs 複数形の「記憶」
- ・過去の客観的な再現としての「歴史」 vs 選択的な再構成のプロセスとしての「記憶」



- ・[個的記憶]「公的記憶」「集会的記憶」と「歴史」、どう区別されるのであろうか。

なぜ「記憶」問題が重要なのか。

問題点②:記憶を喚起する効果について

負の記憶にまみれた一群の美術作品を通じて、戦争の疼痛のような感覚が本当に想起されてくるのか、さらにいえば、戦争に関する記憶が変容される可能性があるだろうか。

「記憶」が喚起される場合、それは「だれ」の記憶であろうか。

問題点③:負の歴史にアプローチできる方法とその特質

- ・実物展示
- ・ダークツーリズム
- ・小説、映画、美術作品、現代アート
- ・デジタル体験とデジタルアーカイブ
- ・その他

視覚文化史/表象文化史の脈絡の中で、美術作品やアートの特質とは？



映画産業と地域活性化の振興にフィルムコミッションの役割 —札幌フィルムコミッションを事例として—

Sapporo Film Commission

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
国際広報メディア・観光学専攻 博士2年 崔鵬

Sapporo Film Commission

研究概要

・フィルムコミッションの定義については、現代映画用語事典(2012)は「映画やテレビドラマなどの制作者に対して、ロケ撮影の誘致を行い、ロケ地情報の提供やエキストラ募集など、撮影に対するサービスの提供を行う非営利団体。日本では、地域活性化を目的に、地方自治体が運営しているケースが多い。日本国内のフィルムコミッションの連絡組織である。」と載せている。

・フィルムコミッション(FC)は映画の撮影チームを支援する時に、該当地域の住民との協力によって、宿泊や交通や食事などの観光を含めて、地域の経済を振興できる。



写真1：フィルムコミッションの役割
(<http://www.japanfc.org/pdf/kooriyama/slide.pdf>)

・ジャパン・フィルムコミッションによると、2000年に日本初のフィルムコミッション(FC)が生まれて、相次いで日本の全国各地でFCが設立され、2001年8月に系統化されて全国フィルムコミッション連絡協議会になった。

・2008年には、撮影環境を改善したり、担当者を育成したり、海外からの支援リクエストに応える一元的窓口の設置を図るために、2009年4月1日に、ジャパン・フィルムコミッションへ移行した。



写真2：フィルムコミッションの活動内容
(<http://www.japanfc.org/pdf/kooriyama/slide.pdf>)

・平成23年札幌市のコンテンツ分野で地域活性化総合特区の指定を受け、平成28年3月までの間、一般財団法人さっぽろ産業振興財団の中で設置され、平成29年7月から「札幌フィルムコミッション」に変更し、地域の経済の発展とまちづくりに努めている。

・ここで、本研究は札幌フィルムコミッションを取り上げ、札幌フィルムコミッションの役割の発見、日本のフィルムコミッションの中での位置づけという視点から、札幌と日本のフィルムコミッション研究の充実を図っていく。

これまで研究上の困難について

・これまでの研究を進んでいるところで、発見した困難とえば、以下の三点である。

1、様々な情報の収集やインタビューや歴史の振り返り向き考察方法はどのように有効に全面的に展開することは全く決めていない。札幌フィルムコミッションは日本のフィルムコミッションの中での位置づけと役割の考察する方法は決めていないこと。

2、本研究は日本のフィルムコミッションの全般研究の中で、どのような位置づけをどう定義するかは疑問として、現在は解明していない状況である。自分の研究自体には、フィルムコミッションの研究における意義と動向の再考のこと。

3、映画研究者の谷川建司(2005)は、映画研究のカテゴリーとして：映画史研究、映画作品論/映画ジャンル研究、映画人研究、映画政策論/映画産業/観衆論の4つに分類している。本研究は映画政策論/映画産業に所属する。この研究の方法論についての迷いことは以下のように考えられる。

- 1、政策に関するデータの扱い方とアクセスする方法。
- 2、インタビュー内容の全面性と客観性の検証方法。
- 3、結論への導き方。
- 4、政策への個別断片的な理解に留まらざるを得ない状況の予防。



写真3：札幌市映像制作助成金活用作品
(<https://www.screensapporo.jp/>)



写真4：札幌フィルムコミッションは国際共同制作の提携
(<https://www.screensapporo.jp/>)

参考文献とURL：

- ・ジャパン・フィルムコミッションの沿革、ジャパン・フィルムコミッションのウェブサイト：<http://www.japanfc.org/about/history.php>
- ・「フィルムコミッションの定義」、山下慧、井上健一、松崎健夫(2012)著、「ドキュメンタリー映画の定義」、『現代映画用語事典』、キネマ旬報社、P.134
- ・フィルムコミッションのポジション、フィルムコミッションと地域活性化スライド：<http://www.japanfc.org/pdf/kooriyama/slide.pdf>
- ・谷川建司「戦後の映画」についての研究動向(『メディア史研究』18、2005年) P.59
- ・札幌フィルムコミッション：<https://www.screensapporo.jp/>



SAIHATE FES 2019 統括の博士後期課程 山崎翔さんと
開催の経緯やこれからのサイハテの在り方について対談形式でお聴きしました。

SAIHATE FES 2019 統括 山崎 翔 × 『Sauvrge』編集委員 岩本 晃典

岩本 : 今年のSAIHATE FESは、発表形式が変わった気がするのですが、主催としてどうでしたか？人生と研究を重ねつつ発表していくようなかたちがあって、新たなスタイルが見えてきたのかなと思ひまして。

山崎 : そもそも、今年はやるつもりではなかったんです。イベントやお祭りは誰かが「やろう！」って言って始まるものじゃないですか。やることが義務化していたら主体性がなくなってしまうし、誘われてきた人も居心地が悪いんで。

今回、たまたま予算の関係でゲストを2人呼べることになって、最初にみんなでミーティングしたときに、「これまでとは違ったかたちにしよう」と話したことが機転でした。

これまでのSAIHATE FESは、基本的に学会発表の線上にあったんだと思います。

ただ、場所の飾りつけをしたり、お菓子を出してみたり、コーヒーを出してみたりというのは学会とは異なりますが、フォーマットとしては一緒だと思います。つまり、発表形式の根本の部分は変わってないということを思ったわけです。

でも、それを変える必要はない部分もあるじゃないですか。ただ、去年のSAIHATE FESで、一旦、自分の中では区切りがついていたので、ちょっと今年は発表形式を変えてみようと思いました。例えば、音が消えて、「〇〇大学の〇〇です」という形式は、どこでもやっているんで、変えてもいいんじゃないかなって。途中でツッコミ入れてもいいし、「ここってどのようにして飛び越えて、この研究に行ったんですか？」というものを入れるとか、そうやっていくことを期待しました。

岩本 : ということはフェス的な要素を組み込んでいこうということを意識的にしたんですか？

山崎 : フェスというか、音楽ライブっぽい感じ。言葉で1つ1つ区切っていくのではなくて、身体性があるようなものですね。

岩本：個人的には、聞いていて「僕も発表側になってみたいな」って思いました。というのは、ゲストスピーカーのお話にあったように、僕も研究と人生がまったく関わってこなかったわけがないって思うんです。例えば、研究対象地を選択した経緯って学術的な「理論的正しさ」に支えられているところを主に記述していきますよね。今回のサイハテは、そうした「正しさ」を構築してきた別の部分というか、自身の生活の中に埋没していた対象地へのアプローチの過程にスポットライトを当てて発表することって、とても面白いなって思ったんです。

山崎：それを聞いて思い出しました。今ってそもそも研究者は分岐点にあるのかなって思うんです。全体のポストが少なくなっていたり、生きづらさという象徴だったりしてますよね。ワーキングプア的な。

すごくラディカルに言うと、研究者っていろんなスタイルがあると思うんですね。例えば、国家プロジェクトや国家間の競争のための基礎研究を行っていくようなスタイルとか、社会課題を解決していくような課題解決型の研究スタイルがあると思います。一方で、その人の来歴や環境が見えてくるような研究スタイルとかもありますよね。

この前、博士の友人と話したんですが、例えば、研究者自身が生きた時代の憧憬を研究に投影しているようなものってあって、そういう研究はとても親しみやすく、それに対して支援してくれるような研究スタイルってこれからあったりするのかなって思うんです。そうしたスタイルが1つの研究者の働き方になるってこともあるのかなと。

今回は、そうしたスタイルをゲストの方が我々の意図を咀嚼してくれて、発表してくださいったんだと思います。すごくありがたかったですね。

岩本：ゲストスピーカーの話、とても面白かったですよね。どうして研究職にたどり着いたのかとか、研究自体が全く畑違いの人にも親和性があって。

山崎：実は、今回の SAIHATE FES をツイッターで告知してみたんですよ。そしたら1人一般の方が来てくれたんです。意外とすそ野が広がるアプローチの研究発表スタイルだったのかなと。そして同時に、その方から「今まで敷居高くて参加できなかった

たんですが、このような場があると嬉しいです」ってレスポンスがあって、ニーズってあるんだって思いました。

岩本：学術研究に興味あるけれど、難しいだろうなって思っている人にとってはいいきっかけになるかもしれないですね。

山崎：そうですね。しかも学術研究側にもいい影響があるんじゃないかなって思います。研究ってコンサルとは違って、自分の行ったことの社会的貢献が目に見えにくいじゃないですか。もちろん、論文がアクセプトされて、学術的権威が上がって高揚を得るのがありますけど、それによって、研究発表を見に来てくれるってあまり短期的にはなりにくいですよ。

あくまでも思いつきなんですけど、今回の SAIHATE FES のゲストスピーカーのスタイルのような、自分が研究で行っていることを例えばカフェとかまちのスペースでパフォーマンスすることで、その場に来ている人に直接的に還元されていくってあると思うんです。これまで、いわゆる学会など研究者の界限だけで話してきたものを、まち場で話すことで、言葉をそのオーディエンスの文脈に変換して伝えていくようになります。そのように自分に還元されていくという意味では、新しい研究の在り方として理系文系関係なくあるのかなと思うんです。

岩本：オーディエンスを意識するというか、学会のオーディエンスではない人たちを想定して行うことで、自分の研究のまた違った色が見えてくるのかなって思いました。例えば、今回のゲストスピーカーの発表を聞いて、本人の論文の記述と生き方の間にあるものをすごく感じて。

山崎：それはいい意味で、人柄と記述のタッチがリンクしているだと思います。もちろん、記述の中にある彼と本人のパーソナリティには差異はあるように感じるかもしれないけど、フィールドワーカーとしての地道な在り方があって、そして精緻な文章を書くという部分に信頼性があるのかなって思います。記述者の生き方や来歴を知ることで見えてくるものってある。SAIHATE FES はそういう点で有意義だったと思います。

岩本：山崎さんありがとうございました！

当日メンバーに開催の感想をいただきました

■崔鵬（博士後期課程）

今回の院生自主発表の参加は初めてだったが、研究の方向を見つける上で、大変貴重な経験を得たと言える。発表の前に、ポスターの準備の発表の練習などを通して、いろいろ勉強になった。また、自分自身の発表はまだ研究内容に関して、未定の内容が多いので、その場で、他の学者の発表を聞いたり、先生のコメントを勉強したりすることができる。しかも、自分の発表に関して、日本語の練習のチャンスを得られて、自分のアカデミーの発展にとっても大切なチャンスだと思う。さらに、その場で、自分で悩んだり、決められなかったりする研究内容に関する発想を述べてから、先生たちから様々な意見を伺う過程で、自分はこれからいかにテーマを決めるか、と何の面に焦点を当てるかに関することは徐々に明確化になった気がしている。

もし、今度はこのような機会があれば、ぜひ活躍しようと思って、できれば、他人の発表を聞いて、積極的に質問することを頑張りたいと思う。今まで、私の抱えている発表会へのイメージは、緊張感が強くて、多数の聴衆が静かに発表を聞くものだが、今回の発表はとても自由な雰囲気の中で行われたのは良かったと思った。先生と学生たちは一緒に座って、お菓子を楽しめながら、自由の雰囲気の中で、研究を聞くのは学生が先生との距離を縮められるように考えられるので、興味がある発表を求めて積極的に動き回ると言う感じで、ダイナミックなものだと思う。

このような発表のチャンスが増えたら、先生方と意見交換ができるようになって、自分の研究やこれからの発表方法や研究方法論について、有意義なコメントで学ぶことができた。問題点としては、これからいかにして自分の考えをわかりやすく伝えるかと言う工夫が感じられ、今回の経験を今後の研究論文や報告などのチャンスに活かしていきたいと思う。

つまり、今回の発表に参加させていただいて、感謝する気持ちがある。まだまだ学ぶべきことが山ほどあると改めて感じている。将来、研究者として発表会に参加しても緊張しないはずだと思って、これからも勉強と研究に頑張ろうとしている。

■山岸 紫（観光創造研究専攻修士課程）

サイハテフェス 2019 のメインテーマは「研究者という生き方」を考えることでした。10 歩下がって自分のルーツ（routes）と研究とを見つめ直してみる。とても重要なことですが、日々の慌ただしい生活の中ではつい忘れてしまいがちです。私自身、11 月末の修論追い込みの時期にこうしたきっかけを頂いたことで、修論執筆を苦しみながらも楽しむことができたのかなと思います。スペシャルゲストの須藤先生と殿谷先生、参加者のみなさま、そして実行委員会のみなさま、本当にありがとうございました！！

■杉村 和紀（観光創造研究コース修士課程）

私自身研究と直接的な縁がない法学部の出身であるため、今回のような研究発表会への参加は非常に新鮮み溢れるものであり、一研究者としての船出にふさわしい場となったと思われる。

また、発表会の趣旨として研究に至った経緯をピックアップしていた点も興味深い。生まれてこの方二十余年、釣りやサイクリング、廃線巡りやアニメ聖地巡礼等の趣味やそこでの様々な出会いといったライフヒストリーが複雑に絡み合った結果生まれた私の研究テーマ。これと似たようなメカニズムを須藤先生のような第一線で研究に取り組まれている研究者の方々にも見てとれた。加えて、研究職以外に従事する傍ら研究を続けられている先輩方を目の当たりにし、今後の生涯学習のプランの輪郭が見えてきた。

研究者の研究といった意義を包含する今回の発表会では、過去から現在、そして未来へと連綿と続く「研究」について今一度考えさせられるものとなった。次回も研究者の人生と研究テーマの関係について言及する機会を設けてもらえれば幸いである。